

生野区の学校再編について考えよう！

～未来を生き抜くこどもを育てる～

生野区長 山口照美

生野区の小学校では、昭和50年から74%もの児童が減り、現在、西部地域の学校では「単学級（1学年1クラス）」の学年が出ている、または数年内に単学級となる予測が出ています。もう、何年も「1学年1クラス、20名程度」の学校もあります。

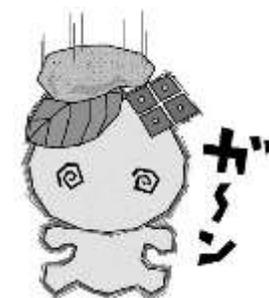
【平成30年度 学年ごとの児童数】※網掛けは単学級

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
東桃谷小	36	40	41	38	31	33
勝山小	30	47	39	30	29	31
北鶴橋小	19	23	16	16	15	22
鶴橋小	28	22	23	32	23	26
御幸森小	22	10	14	11	23	6
中川小	45	61	51	51	65	45
舎利寺小	27	29	33	27	45	44
林寺小	16	11	19	15	16	13
生野小	29	31	35	28	24	42
西生野小	23	18	15	13	19	17
田島小	33	31	25	43	34	30
生野南小	27	37	29	34	26	23

これは、全国的な課題でもあり、年間約500校もの小中学校が閉校しています。

本来、15年ほど前から計画的に「空き家対策によるファミリー向け物件への建替推進」「生野区の子育て世代向けイメージアップ」「教育環境の改善（単学級を解消し、こどもも教員も学びあえる学校づくり）」を進めるべきでした。

特に住環境の整備は、行政だけでは不可能です。大阪市のある地域では、10年前から児童の減少を予想し、自ら不動産に投資をしてまちににぎわいを呼び込んだ民間事業者の方がいます。しかし、生野区ではそのようなまちづくりが行われないまま、児童数が減少しました。



地域によっては、20年ほど前から「2小を1小にする」計画が出ていたところもありますが、反対意見があって進みませんでした。その結果、「2小を1小にしても数年で単学級になる」状況が生まれてしまいました。

そこで、平成25年度末に学校配置の見直しに関する取組方針をとりまとめた生野区小・中学校教育環境再編方針「学校配置の見直しについて」を提示いたしました。

そこから説明会やワークショップを重ね、**平成 27 年 7 月**には「**生野区西部地域教育特区構想**」、**平成 28 年 2 月**には「**生野区西部地域学校再編整備計画**」を地域や P T A の方のご意見をいただきながら、策定してきました。

【生野区西部地域学校再編整備計画の経緯】

平成 22 年 2 月	「大阪市学校適正配置審議会答申」 小規模校の適正な教育環境の確保を推進
平成 26 年 3 月	生野区小・中学校教育環境再編方針「学校配置の見直しについて」 区内を 4 ブロックに分けて再編を検討
説明会・ワークショップ等の実施	
平成 27 年 7 月	「生野区西部地域教育特区構想」 教育環境の充実やまちづくりの観点を踏まえた学校再編方針を打ち出す
説明会・出前講座など意見交換	
平成 28 年 2 月	「生野区西部地域学校再編整備計画」策定
説明会・意見交換会等の実施	
平成 29 年 7 月	教育内容として「生野の教育」を提案
各中学校区における説明会や地域・P T A などでの説明	
平成 29 年 12 月	勝山中学校・鶴橋中学校 学校設置協議会の設置
平成 29 年 12 月	生野中学校区学校設置協議会準備会、 田島中学校区将来の学校を考える会設置

※現在、勝山・鶴橋中学校の再編について、平成 31 年度の「桃谷中学校」開校に向けて話し合いを進めています。

児童数の減少に伴い学級数が減り、年々、教職員の数が減っていく小学校では「早く再編してほしい」という保護者や学校現場の声もあります。また、「丁寧に進めてほしい」という意見もあり、平成 26 年の再編方針では平成 29 年度までの見直しを目標に、また平成 28 年の計画では最短で「平成 31 年春に再編実施(単学級の解消)」も見据えたスケジュールとなっておりますが、現在も話し合いが続けられています。

【現在の各中学校区の状況】

勝山・鶴橋中学校	平成 31 年 4 月に「桃谷中学校」としての開校に向けて協議中。
東桃谷小・勝山小・北鶴橋小・鶴橋小	東桃谷小学校の校地に、勝山・鶴橋中の再編後の学校と 隣接型小中一貫校 とする再編案を提示している。
御幸森小・中川小 舍利寺小(一部)	大池中学校と教員や児童生徒の交流を強めた 連携型小中一貫校 として、中川小の校地での再編案を提示している。
林寺小・生野小・ 舍利寺小(一部)・ 西生野小	生野中学校との 隣接型小中一貫校 を西生野小学校地に開設する素案を「学校設置協議会準備会」で意見交換。
田島小・生野南小	田島中学校地に新校舎を建設し、 施設一体型小中一貫校 とする素案を「将来の学校を考える会」で意見交換。

※舍利寺小は全員が同一校に再編するなど、複数案を提示

◆元小学校校長、生野区長としての想い

ここから平成29年度より生野区長となりました、私の考えをお話します。私は平成25年度～27年度の3年間、児童数が100名前後の小規模小学校の校長をしていました。

学校再編の課題に向き合った時、地域の方の声を大事にすることは理解しつつも「こどもの教育の場であり、教育の担い手である『学校の声』を聴いてもらえない」状況に、元校長として困惑しました。

校長時代、たまたま人間関係のトラブルなく6年間過ごしたクラスの子ども達は、小さな学校で大事にされた温かな記憶と共に、卒業していきました。小さな学校には家族的な良さがあります。



一方、男女比のアンバランスなクラス（13名中男子4名、というクラスがありました）での寂しさや、低学年のうちできた力関係を崩せないまま過ごすしんどさも目の当たりにしてきました。

何より、日本の教育の利点である「集団で学びあう教育」「学校行事を軸とした教育活動」において、小規模校ではこどもの力を発揮しきれない場面に出会ってきました。

個別指導においては、目が届きやすくありますが、運動会も2学年一緒にないと集団演技ができない、学芸会や音楽会でも学年だけでは難しい、学力面でも話し合いの場面で多彩な意見が出てきにくいなど、校長として課題を感じていました。



多様な価値観に出会い、お互いに認め合いながら育つべき時期に、狭いコミュニティで育てなければならない。もちろん、学校現場は知恵を寄せ合い、教職員が工夫をしてこどもを育成していきます。しかし、担任たちからは「3クラス、せめて2クラスは欲しい」と言う声が聴かれました。

私が校長を務めた3年の間にも、全国的な課題として「教員の大量退職・大量採用」の時代が訪れており、若い教員が小規模校にやってくるようになりました。かつては、ベテラン教員が1学年1クラスを回しており、安心して任せることができました（ただし、単学級は閉鎖的になりやすいという課題は、ベテランでも若手でもあります）。

しかし、未経験の担任がたった一人で授業の予習をし、社会見学などの準備をし、保護者とやりとりをしなければならなくなってきました。複数学級あれば、校長として「若手＋ベテラン教員」「若手＋その学年の経験者」などの組み合わせで編成をし、教材作成や行事の準備も相談しながら進められるように配慮します。

実際、隣のクラスが無いことによる担任の負担と責任は大きく、みんなでフォローはしていましたが、小規模校の難しさを感じました。



また、教員が30名いる学校でも、15名しかいない学校でも同じだけの書類や校務があり、一人ひとりの業務負担が大きいことも課題でした。

このようなお話をすると「そんなのは学校の都合だ、予算を取って人を増やせばいいじゃないか」と言われることもあります。しかし、配置される教員の数は学級数に対して定められている定数をもとにしていて、仮に予算があっても全国的に労働人口が減っている中、そもそもの「教育の担い手」である教員も減っているのです。

さらに、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなどの専門家を入れた「チーム学校」という考え方のもとに、外部人材が学校をサポートしてくれます。しかし、学校数が多ければ人が追い付かず、複数校に1人という配置になってしまいます。



私は元校長として、まず「子どもたちが複数クラスで学べる」教育環境の必要性と、「教員が隣のクラス同士で学び、協力していい授業ができる」複数クラスの必要性から、学校再編を進めるべきだと強く感じています。

よく「再編ありきなのか」と言われますが、国の方針から言っても、大阪市の方針と小規模校の現状から考えても再編は避けて通れません。これは、教育の課題です。その教育の問題点が置き去りになり、長年議論が停滞し続けていることを、残念に思っています。



ぜひ、小中学生のお子さんをお持ちの、また乳幼児のお子さんをお持ちの保護者の方に「自分ごと」として関心を持って一緒に考えていただけるとうれしいです。

◆生野のまちの現状と、未来を考える

学校再編の話をする、「こどもを増やす方が先だ」と言われます。しかし、残念ながら生野区では今後、こどもが大幅に増える可能性は低いと予測されます。

大阪の中心市街地に高層マンションが建ち、児童が急増しているのは事実です。その効果で少しずつ周りの区も子育て世代が増えてきています。隣の東成区は、人口が急に増えています。では、生野区が「選ばれない」のはなぜでしょうか？

まず、大きな土地が空かないので、高層マンションが建ちません。少し大きな土地が空いたかなと思うと、サービス付き高齢者住宅や施設が建ちます。一方で、空き家を取り壊されるとファミリー向けの戸建てが建ち、少しずつですが若い世代が住み始めています。



この流れを推し進めるために「保育施設・子育て環境の充実」「教育環境の整備＝いい学校を作る」「空き家対策の推進」で、子育て世代の定着や流入をめざすことが必要です。

学校再編を機に、子育て世代が住みたくなるような学校づくりと、「まちの教育力」を上げることをめざしています。教育環境の整備が進まないで、人口減を止める決定的な打ち手がない状況です。

さらに、シティプロモーションを通じて「子育て世代に選ばれるまち」の魅力をPRする必要もあります。

実際は治安もよく住みやすいのですが、ネガティブなイメージが広まっており、区民アンケートによると過半数が「まちに魅力を感じない」と答えています。



保育環境もよく、ほぼ第一希望の園に7割以上が入れる区でありながら、選ばれていません。区でも検定試験への予算を用意するなど、学力の底上げをサポートしています。まだ、課題のある学校もありますが、それは他の区でも変わりません。

区内のどこからでも、自転車で10分圏内にJR・地下鉄・私鉄の駅があり、バスの本数は少なめですが、平成31年度秋よりBRT（高速バス）の社会実験も始まり、近隣自治体より「職住近接」または区内に中小企業も多い「職住一体」のまちとして、コストパフォーマンスに優れたまちでもあります。

それなのに、「子育て世代」は生野区ではなく、他の区を選んでしまいます。小学校が小規模であることや、再編計画が固まらないことを理由に区内での移動や転出する傾向もあります。

……私は区長として、この現状が残念でなりません。

◆小中一貫教育と「生野の教育」がめざすもの

再編を機に、中学の専門性の高い教員が英語や理科の指導を小学生のうちから実施することで、着実に力をつける。「未来を生き抜く力」として中学卒業時点で到達させたい目標を立て、小中の先生が連携して9年間の積み上げを着実にを行う。

小学生も高学年から中学生の部活に加わり、「3年間での学力・体力向上」という短期スパンではなく「9年間での学力・体力の育成」に取り組むことができます。



こどもも大人も人数の増えた学校で、学びあい、育ちあう。一緒に育った地元の仲間が多ければ、また生野のまちにつながってまちを支えてくれる。

人生100年時代を何度も学び直せる底力を、9年間を通じて育てていきたい。ものづくりが身近にあるまちで、**体験型のキャリア教育**をしたい。



在日韓国・朝鮮の方と共生してきた歴史を踏まえ、今や60か国を超える外国籍住民が暮らすグローバルな生野で、**世界で活躍できるこどもたちを育てたい**。

……そんな「生野の教育」を思い描き、平成29年の夏には説明会もさせてもらいました。

平成26年の再編方針にあった「平成29年度までの見直し」という目標から、数年の遅れが予想されています。「もっと丁寧な話し合いを」という声にお応えしてきたからであり、「答えありき」で進んできたつもりはありません。

しかし「全員にとって100%の正解」が無いのも事実です。最後には「教育的な視点で判断させてほしい」とお願いをさせてもらっています。

素案に対して意見をいただく場で、議論を進めていく一方で「こどもたちのために早く進めてほしい」という声もあります。

そのためには「最短で新しい学校を作るスケジュール」を**選択肢として残すことも重要**だと考えています。学校の設計だけで1年、その後の工事で2～3年かかる学校もあります。今から最短のスケジュールは、以下の通りです。

【最短の場合のスケジュール】

平成30年11～12月までに「新しい学校の開校年度」が、学校設置協議会で議決された場合

東桃谷小・勝山小・北鶴橋小・鶴橋小を再編した（仮称） A小学校	平成34年4月開校
御幸森小・中川小・舍利寺小（一部）を再編した（仮称） B小学校	平成34年4月開校
林寺小・生野小・舍利寺小（一部）西生野小を再編した（仮称） C小学校	平成34年4月開校
田島小・生野南小を再編した（仮） D小学校	平成33年4月開校
平成34年4月より生野区全域で学校選択制を導入	

決定が遅れると、そのまま1年ずつ後にずれていきます。すべての再編が終わったのち、学校選択制を導入します。

◆再編完了と同時に、区内学校選択制を導入

保護者のみなさんの一番の不安は「通学が遠くなる」ことだと思います。安全確保をさまざまに過去の事例も踏まえて対応を考えます。また、再編完了と同時に「区内学校選択制」を実施する予定です。そうなれば、（学校の施設状況等により受入制限がある場合もありますが、）近い学校を選ぶこともできるようになります。そういった課題解決のために、学校設置協議会準備会でも地域の方やPTAの方に意見を聞いています。



学校選択制を入れても遠方となる鶴橋駅周辺の児童、そして林寺小・生野南小の校区の端から通う児童の通学の安全については、集団登校や安全な経路の確保、低学年のうちの帰宅時のサポートなど、開校時点で該当する児童数や学校・保護者の方と実際の通学路を見て話し合いながら、具体策を出していきます。

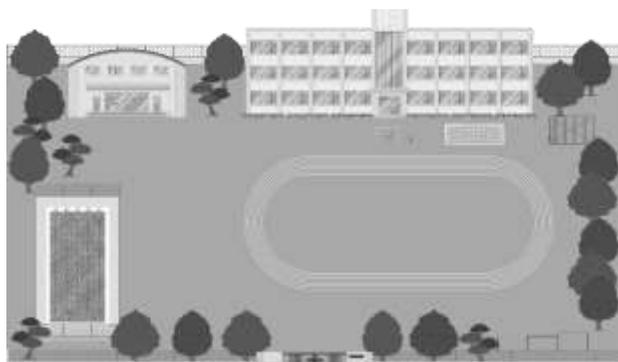
校区の広がりに伴う児童の安全面については、放課後事業の充実により「学校で学習と体験活動をして過ごす」ことを基本とするか、学校跡地を活用して元小学校区ごとのこどもの居場所を作るといった考え方もあります。「小3までは元小学校区の校区外に遊びにいかない」などのルール決めや、通信機器を使った安全確認ツールの導入も検討しています。

◆疑問点は、何でも質問してください

この学校再編を進めるにあたって、私の発言の一部だけが大げさに伝わったり、時には言っていないことが広まったりしており、コミュニケーションの難しさを感じています。

学校跡地に関しても「売ってしまう」「地域に管理を押し付ける」などの情報が出回っていますが、生野区は大阪市として例外的に防災上の理由で小学校跡地を残す方針です。

ただ跡地を残すだけでは荒れてしまうので、平成30・31年度にかけて「学校跡地を核としたまちづくり」をめざした調査と構想づくりの取り組みも進めています。



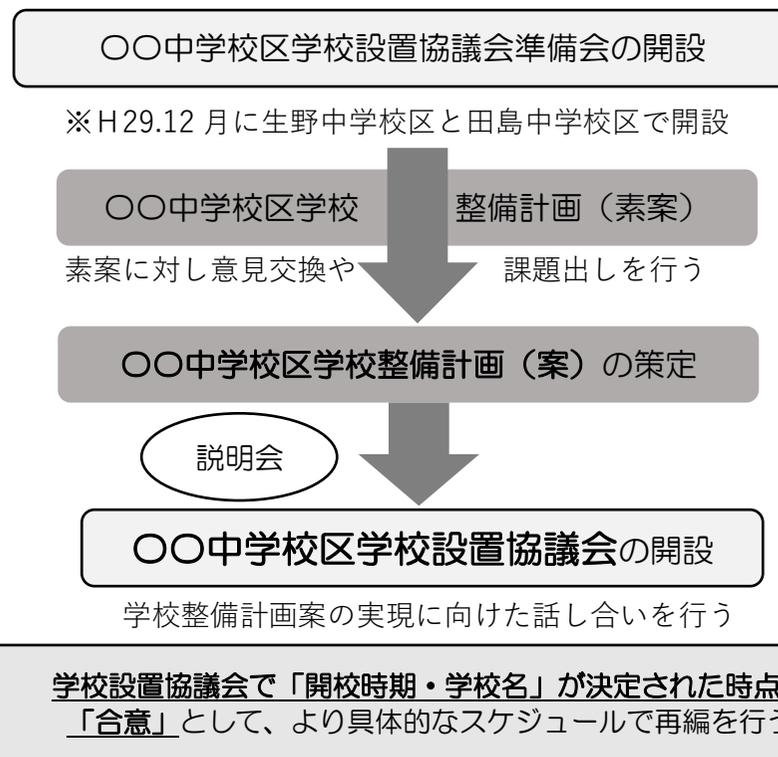
避難所として
管理します！

学校施設は広いので、地域で活用したいスペースについて相談をしながら、まちのにぎわいや子育て支援、雇用につながる活用を検討していきます。

最後に、お願いがあります。

話し合いで参加して下さっている地域の方やPTAの方は、地域や保護者の思いを代弁して下さっています。さまざまな思いを受け止め、辛い立場で参加していただいている方もいます。決して、各地域で代表の方たちが批判されることのないよう、心から多くの方の理解を願っています。

【学校設置までの流れ】



◆「小規模校のまま残す」ことはできないの？

基本的に、文部科学省の学校規模の適正化の方針のもとに、全国で学校再編は進められています。離島や学校が無くなることで地域の維持が厳しい過疎地域でのみ、「数名の児童に対し、教員を配置する」予算を出してくれます。

しかし、徒歩10分で隣の学校になってしまうほど学校が多い大阪市内では、再編をして複数学級の教育環境を整えることが優先されます。



私が校長を務めた学校は、創立140年の歴史ある学校でした。地域の方の学校を想う気持ちは、痛いほどわかっています。

小規模校も何年も続くと「当たり前」になってきます。「何も困ってない」「いい学校だ」という声は、各学校の奮闘と地域・PTAのみなさんの支えで成り立っており、そのことを元校長としてうれしく、ありがたく思っています。

ただ、私が「15年前に計画的に話し合いを始めておくべきだった」と思うように、5年後、10年後の学校が困るような環境を放っておくわけにはいきません。

さらに、全国的な少子化の中で、この5年ほどが「子育て世代に選ばれるまちづくり」のラストチャンスだと考えています。

「決断した責任」は問われますが、「やらなかった責任」「先送りした責任」は問われないことを、疑問に思っています。だからこそ、思い切って課題解決のために、話し合いの席についていただいているみなさんに感謝しています。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。今後も生野区全体のこどもたちの保育・教育環境の充実に向けて努力して参りますので、どうぞよろしくお願ひします。

いつでも、大阪市教育委員会と生野区役所の担当者で、勉強会や意見交換の場に出向いていきますので、お気軽にお問合せください。ホームページでも最新情報を掲載しています。

西部地域 学校再編の動き

生野区役所 地域まちづくり課

電話：06-6715-9920

メール：ikuno-edu@city.osaka.lg.jp

